

■授業実施ツール・方法

2020年度新型コロナウイルス感染症下における実技授業において、遠隔授業のまずメディアの特性を生かした運用の仕分けを行なった。メール：Gmail，SNS：Slack，資料配布・課題提出先：Google classroom，講義：リモート会議システム（zoom）。授業開始前に研究室から各学生に対し、通信環境と視聴端末を確認した上で、それぞれのメディア特性を紹介し使い方を説明した。

授業告知をSNS（Slack）を使い、毎朝各学生に配信。授業はリモート会議システム（zoom）を使い、助手によりまず出席点呼をzoom上で声掛けをする。反応ボタンやチャット機能利用し、顔出しは強制しない。またzoomは授業内での問題点や質問をチャットで受け付け、情報保障者は限定チャットにて文字起こしをしており（情報保障者の文字起こしが助手の業務であるのか、という問題点以外は）これは大変役に立った。資料書類や課題内容レジュメなどは、Googleclassroomを使い、課題提出フォルダもGoogleclassroom上にて締め切りを設け運用した。Googleclassroomの限定コメントや採点・返却は行なわず、zoom上で講評をし、欠席者にはそのzoomの収録動画の視聴を促し、遅れ提出はGoogleclassroomで、限定コメントで評価を行なった。

■授業実施に際し、工夫した点や今後の授業運営で活用できそうな点

授業開始になるまでに各学生の通信環境、受講端末の確認、使用アプリケーションの確認、zoomの設定、Slackの設定を徹底的に行なった。それによって円滑な授業運用ができた。zoomのチャット機能による、情報保障者への文字情報は大変役に立った。また課題講評中に学生間での意見や感想もチャットに上がったことは、対面のできない状況の中クラスの盛り上げに一役買った。

Slackの運用が一番効果的で、個別面談や制作面でのサポート、就職アドバイスなどはSlackのDM機能が大変役に立った。

■問題点や改善点、成功事例

全学での統一の授業フォーマットがなかったため、共通科目など各科目で授業運用のやり方が違うことは、学生負担を増やしていた様を感じる。また実技研究室としては、共通科目の課題の分量が把握できないこと、出席率提出率が把握できないことなどが、学年末にいきなり留年報告されたりする事態を招いていた。

実技課題に関しては、学生間の企画や制作進行状況がまったく見えないので、人に影響されない独創的な作品が生まれたりもしたが、同時に切磋琢磨できず、モチベーションが落ちる学生が出てきた。通信環境や使用アプリケーションの支給や貸与、視聴端末の整備ができない点が教育の質や習得技術の格差、ひいては就職にも影響する恐れがあり、非常に問題であると感じている。学生の学びの格差を出してしまっている様に感じる。

研究室では、PCの購入の促しと、それに纏わるPCスペックの案内や商品選定のアドバイスを丁寧に行なった。卒業制作は、年末ようやく登校許可が出ることによって卒業制作や展示計画の指導を行ない、対面による指導や展示計画の現地指導は大変効果を生み、とてもいい卒業制作展が行なえた。

■学生からの要望・意見に対する対応事例

学費を払っている学生や保護者側として、コロナ禍における設備費の返納希望や大学の誠意ある対応を期待している学生、並びに学びの質に問題があることを指摘している学生が少なからずいたが、大学の総意とは別に、研究室の教員・助手の真摯な対応や細やかな対話によって信頼を損なうことなく、映像メディアは2020年度は最後まで走り切ることができたと感じている。

「誰に言ったら要望を聞いてもらえるのか」という質問を始め、直接学務や総務に保護者から電話が入ることもあった様である。4年生は卒業際に「大学への文句が、研究室の文句に擦り代わってしまうのが嫌だ」という意見も何人からも聞かされた。

実際複数年次掛けての設備投資であるため、大学の総意は理解できる、とした上で、カメラ機材やスタジオ使用のみならず、電気代やガス・水道、冷暖房、グラウンドの整備、植栽、体育館、図書館ほか消耗品など、一切使用しできなかったということを挙げられた。この部分は大下区全体の経費なため、研究室ではまったく収支が検討付かず説明できなかったのも、こう言った点に関して丁寧な説明するべきだと感じていた。卒業後も本学の同窓であることを誇りに思い、大学時代がよい思い出になってもらえれば、といった研究室の理想は今年は難しい様と感じている。